

今を生きる

紀美野町立美里中学校 3年 鞍 結姫乃

私には、認知症の祖母がいる。敗血症を患い入院したが、コロナ禍で面会ができず、私たち家族は祖母に会えないまま、病気、認知症が進行していった。あまり長くはないかもしれないと、病院の先生に告げられた。

コロナが少し落ち着き面会に行くと、祖母は痩せ細り、体には何本もの管が刺さった痛々しい姿。さらに、認知症の進行により、私の名前を忘れてしまっていた。ショックだった。今まで、涙や弱音を吐いているところを見せたことがない、元気で優しい祖母が、「帰りたい。」と私の前で泣いている。怒って携帯電話を壊してしまうこともあった。そんな姿を見るのは苦しかった。悲しかった。私は涙をこらえることができなかった。

そんなある日、お医者さんから「祖母の腰の骨が崩れていて、歩くことができない。」と告げられた。十時間以上の手術を受けると治る可能性もあるということだったが、年齢・体力的に難しいのではないかと諦めた。その時、祖父が立ち上がった。「十時間以上もかかる手術をしても治らないのなら、家に連れて帰って自分が介護をする。」と言った。祖父母は二人暮らしのため、祖父の負担を考えると家で介護するより病院で過ごしてもらった方が良く、皆が口を揃えて言った。しかし祖父は介護ベッドを買い、何十年も勤めていた会社を辞めた。私達に祖父の本気が伝わった。

祖母が家に帰ってきた。入院する前とは全く違う姿で、元気がなく何も食べられない状態。私の名前も完全に忘れ、ベッドから落ちるなんてことも度々あった。祖母が天井を見つめて、「歩きたいなあ。」とつぶやいた時はとても切なく悲しかった。しかし祖父は、祖

母のご飯作り、オムツの交換など、挫けず必死に介護をしていた。祖父の姿が、どんどんやつれていくように見えた。私達も祖父の負担を少しでも減らせるようにと、毎週のように一時間以上かけ、祖父母の家に通った。

最近祖父のお陰で、祖母の体調は奇跡的に回復している。祖母が回復すると、祖父の顔が緩んだような気がした。そんな時、祖父がこんなことを言ってくれた。

「ゆきのたちが顔を見せに来てくれるだけでじいちゃんもばあちゃんも嬉しいんよ。元気出てくるわ。」その言葉を聞いた時、心がずっと軽くなった。それまで、中学生の私がどのようなサポートをすればよいのか悩んでいたけれど、祖父にとって私達の笑顔が心のサポートになっていたのだ。私はまだ、看護師さんやお医者さんのように、直接人を助けることはできない。しかし、「私の存在そのもの」が、祖父母を笑顔にできる。私にもできることがあるということが、とても嬉しかった。

私は、今回のことから「当たり前の日々がいつまでも続くとはかぎらない」ということを知った。思いもよらない出来事に動揺し、嘆くばかりではだめだということも学んだ。一方で、「私の存在そのもの」を喜んでくれる人がいるということに気付くこともできた。人はお互いに助け合って生きていく。祖母だけでなく、私自身も多くの人々に支えられながら今を生きている。だから私は、周りに感謝しながら、一日一日を大切に生きていきたい。そして誰もが幸せに生きられる社会を目指し、一歩踏み出せる大人になりたいと思う。